

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 岡本かの子『鮎』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



映画化されてみたいです。 [予告編](#) ともよが橋本愛さん、湊がリリー・フランキーさん。

第 28 回のツイキャス読書会の課題図書は、岡本かの子の『鮎』です。

[青空文庫 岡本かの子 『鮎』](#)

[朗読](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『鮎』 読書感想文

読んでいて頭に浮かんだ歌が『故郷』でした。

兔追いしかの山、小鮎釣りしかの川、夢は今も巡りて  
忘れ難き故郷、、、

川に泳ぐ鮎とお店のお客様の入れ替わりのたとえば  
とても清々しく感じられ微笑まされました。  
鮎の様な人とか。。。

少しデビエートしますが数年前から世界は SUSHI ブームでどこに行っても SUSHI という看板がみられます、しかし、あくまでも SUSHI であって鮎ではないところばかりで『福ずし』で出してくれる美味しそうなお寿司にはなかなか出会いません。

2~3 年前旅先のローマで《PIZZA-SUSHI-KEBAB》という看板のお店がありいくら何でもとゲラゲラ 笑ってしまいました。

周りの人に不思議そうに見られそこを去りましたが今もあの看板は忘れられません。

ヘルシーフードということでお寿司がここまでポピュラーになったわけですが、昔、川魚の鮎を塩と炊いた穀物（お米）につけ醗酵させた保存食がお寿司の元祖《鮎寿司》らしいですね。

鮎のつくりの旨はものを熟させるという意味があるそうです。

醗酵=熟成

酢、醤油、味噌、納豆、酒、お漬物、、、

外国にも昔からビール、ワイン、パン、生ハム、チーズ、キムチ、ナンプラー、サワークルーツ、、、などの醗酵食がありますね。

味噌の麹菌、乳酸菌、酵母菌などの微生物の発酵で生成される

「メラノイジン」に優れた抗酸化作用があり

お漬物の乳酸菌は花粉症、免疫向上に効果があると言われています。

整腸（体）を助ける体内の菌ミクロビオタの数は

100,000,000,000,000(100兆)ぐらいで約2kg。。。

豊富な発酵食品が身近にある日本が世界一の長寿国の理由の一つだったんですね！

(おわり)

## 『鮎』 感想文

私が前半部分でまず心に引っかかったのは、ともよが寿司屋の娘であることを引け目に感じている点と、女学校の先生が彼女を問題視していた点です。現代の感覚では腑に落ちませんでした。話の年代が大正なので、当時、寿司屋は教養のない身分の低い人が営む職業と蔑視されていたのだと思います。また、男女が肩を並べて歩くことや対等に口を利くこともなかった時代とも思います。特に若い女性はずつましく生きるのが当たり前だったのでしょう。ともよのような独立心を持ち、手伝いを通して家族の前ではさらけだせない男の本音の姿にふれることで培われた世事もかじった若い素人の女性は、かなり珍しかったと思います。

そして、両親が教育への劣等感から、湊氏を他の客と違い特別視していたように、ともよも、湊氏にあこがれと尊敬から引かれていったのでしょう。

後半、湊氏が自分の幼少期を語る場面では、自分の病的な体質に苦しみながら母に嫌われたくないという思いと、本当の母さんがいるのではないかと思うほど実の母さんに不満を持っている葛藤が書かれていて、湊氏の悲しみ苦しみが痛いほど伝わってきました。

そしてその後の文章で、母に頭を下げさせてしまったことで自分が「わるい」「悪人になった」と、一生残る心の傷を負った湊氏の気持ちを知り涙があふれました。ここを読んだ時、自殺してしまうかもしれないと思いましたが、それを救ってくれたのがお寿司と分かりました。

母の手による愛のこもったお寿司。湊氏は完全に嫌われてしまったと思った母から愛をもらうことができました。同時に、今まで自分にできなかった母へのプレゼント（母を喜ばすこと）ができました。この二つの喜びは生きる希望を与えたと思います。

その後、父の好む男性になっていったのも、父を喜ばすために父のし好にあわせたのでしょう。でも、自分は最低の人間であるというトラウマは消えず、福ずしで、他の身分の低い人にも無礼な態度を見せなかったのは、自分を悪い人間と卑下していたからに相違ありません。

こんな悲しい話を書いたかの子さんに私は関心を持ったので、読後に「岡本かの子」を検索しました。そして新しい発見をしました。

かの子さんの実生活はかなり湊氏に似ていましたが、違うところもありました。かの子さんの場合は母親に対しては育ててもらえなかった悲しみと不満だけで心の傷となった懺悔の心情は自分が子供を亡くしたことから生まれたものと分かりました。また、遊び人風的な生活をしていたのは、父親ではなく夫の一平氏であったことも分かりました。

また、かの子さんの人生から、かの子さんが子供を亡くしたことに苦しみ、「歎異抄」によって立ち直ろうとしている心情が情景描写に表されていることが分かりました。

川の流れや電車の流れは人生の流れ。人や人生はとどまらず、常に流れていくもので、自分も再生できるかもしれないという気持ち。また、ともよへの告白時にそばに咲いていた火事に合っても生き残り再生しようとしている藤づるやつつじは、かのこさんの願いを象徴していると推察しました。

他に、湊氏が告白した時に買った「ゴーストフィッシュ」は、検索したら深海魚で体が透けて見えることがわかり、これは湊氏のこの時の心情（自分の姿をさらけ出す）のサインではないかと思いました。「湊」という名も、今の環境（港）を出発して、新しい人生に向かって生きたいという気持ちから作者がつけたのではないかと思いました。

（おわり）

## 『鮨』 感想文

無性にお寿司が食べたい！ 気持ちになりました。

子供の頃はそんなに好きではなかったのですが、年齢を重ねるほどにお寿司が好きになりました。

さっぱりとした寿司飯に油の乗ったネタ。想像するとすぐにでも食べに行きたくなりました。(回転寿司)

湊という男性客と店の娘のともよとの交流が微笑ましいなと思いましたし、どちらも不思議な存在だなと思いました。

ともよは大人のお客さんを相手に話したりするからなのか子供らしくない子だなという印象を、持ちました。

湊は表面上では人付き合いの良さそうな感じを受けるけれど、自分の内面を人に一切見せようとしなないミステリアスな人だなという印象でした。

湊が姿を消したのは、湊の事をいつもよく見ているともよに全てを悟られる前にいなくなりたいという気持ちと、ともよにとっても自分という存在とあまり深く関わらないほうが良いと思ったのかなと私は思いました。

鮨を食べる事によって母親との思い出に浸っていて今を生きていない気がして、湊という人は生きていて楽しいのか疑問に思いました。

自分の生きている意味を見いだせない人なのかと思いました。

ともよが、湊が居なくなったあと病院の焼跡に行ってみたりしていたのは少し切なくて、いじらしいなと思いました。

(おわり)

## 「鮎」の感想文

岡本かの子の「鮎」を初めて読んだ。というか、岡本かの子という作家を初めて知った。本作は昭和 14 年の作品で本人も同年に死去している。

東京の街の裏通りにある福ずしを営んでいる両親の娘のともよと客の湊との交流と、湊の幼少時の鮎にまつわるエピソードが描かれている。

ともよは看板娘として店に出ているため、表面的には世慣れしているが、漠然とした孤独感を抱いており、理智的な中にどこか憂いのある湊に相通じるものを感じたのか、湊に興味を惹かれながらもつつけんどんに接したり、かと言って湊が他の客と親し気に話していると妙な嫉妬を抱いたりしていた。

そんな湊と外で偶然出会い、ともよが「あなた、お鮎、本当にお好きなの」と訊いたことから湊の幼少期の話が始まる。

湊は幼少時、敏感な子どもで食べ物があまり喉を通らず、痩せて不健康な子どもだった。悩んだ母親が湊が食べられるように工夫を凝らし目の前で鮎を握って食べさせてくれた。それからは湊は見違えるほど健康に育っていった。

その思い出から湊は福ずしに通っていたことが語られた。

淡々と話が進んでいくので、この作品から何を読み取るかということはなかなか難しいが、湊にとっての「食べること」について考えてみたい。

湊の家は早晩没落していくことがわかっている旧家で、湊は家族の脅えを取り込んだかのように、「体内へ色、香、味のある塊団を入れると、何か身が穢れるような気がし」ていた。

以前どこかで「食べること」は現実を受け入れることと同義であると聞いたことがある。幼い湊には周囲のすべてがおぞましい異物として捉えられていたため、それらを体内に入れることを拒絶していたのだ。

そんな湊を心配した母が調理器具も自分の手も清潔であることを示し、目の前で鮎を握ってくれた。母の提供された「現実安全である」というメッセージを受け取ることで湊は現実を肯定することができたため、食べ物を食べられるようになったのだ。

(おわり)

## 『鮎』 読書感想文

《ともよ》は、女学校を出たばかりの10代後半の女の子と思われます。両親が鮎屋を営んでいます。そのお店を手伝っていますが、「あきあきする、あんなまずいもの」と常連だけに出すとおきの裏メニューを評価していたり、「その程度の福鮎の看板娘であった」とあるように、お店で扱う商品にも接客にもあまり腰を入れていない様子に描かれています。

その両親との意思の疎通は浅く感じられ、女学校時代のエピソードも友達が居ない様子なので、《ともよ》はかなり孤独なのだと思います。

両親はお互い衝突せず、まるで猫社会のような関係を築いているように思いました。《ともよ》のことは、内面より世間体の心配の方が強い感じです。

お店に来るお客さんは、「お互いに現実から隠れんぼうをしているような者同志の一種の親しさ」を示し、そしてただ《ともよ》と少し接して通り過ぎるだけの存在です。

親や学校から孤立して孤独にいる《ともよ》に、似たような孤独感を共鳴した湊が、自身の「さほど鮎を喰べたくない時でも鮎を喰べるというその事だけが湊の慰めとなる」という内容の長い談話をして、《ともよ》にメールを送ってくれたのかと思いました。是非、そうであって欲しいです。ですが、湊に毒を感じます。お店にいる時、いい人で通っていますが、湊の内面と外面をよくよく考えるとなんだか感情がなく、サイコパスっぽい印象を受けました。談話も作り話のように客観的で細かすぎて薄っすら恐怖を感じます。

胎児の頃からすでに、呪われていた湊の唯一の癒しが鮎です「鮎というものの生む甲斐々々しいまめやかな雰囲気、そこへ人がいくら耽(ふけ)り込んでも、擾(みだ)れるようなことはない。万事が手軽くこだわりなく行き過ぎて仕舞う。」とあるように、悲しいですが、最後ゴーストフィッシュを《ともよ》に託す行為などから、逃れることができない孤独という厭世観を表現しているのかなとも、思っていました。

(おわり)

## 岡本かの子 『鮎』 読書感想文

東京の下町と山の手の境い目にあるという「福ずし」。一風変わった湊という男はこの店の常連客である。

看板娘のともよも鮎屋の主人である父も、他の客とはどこか違うものを感じていた。鮎の食べ方は巧者。職業はわからないままの独身者。いつしか先生と呼ばれるようになり、いい人を通っている。文中に描かれた身なりも鮎の好みもいかにも落ち着いた紳士で「粹」。「いい道楽者」というらしい。

ある日、店の表で偶然会ったともよに尋ねられた。

「お鮎、本当にお好きなの」

湊は「さあ」と答える。

子供の頃の話をはじめた湊には、母が二人いた。パラドクスな幻想と共に過ごしている。実の母がいるのに、内密に心は幻想の母を呼ぶ。ろくに食べ物が食べられない偏食な弟は兄姉からも、父親でさえおかしな子だと思っていた。実際、食事というものにどこか身を穢されるような気持ちがし、餓えを感じながらも食べる気にならない。色、香、味のある塊を体内に入れることが苦痛だった。切ない感情でいっぱいになり、気が遠のく。

「お母さあん」と呼ぶ声は孤独と幻想の部屋に宙吊りになるが、応えはない。実の母は懸命に息子に食べてもらえる食事を工夫する。それが手製の鮎だった。青葉の頃の縁側で母が握ってくれた鮎は臆病な子に初めて魚が美味しいと身体中が痺れる新鮮な世界を開かせた。そのとき、ふと、現実の母に幻想が一重に重なってゆく。ただ、ぴったり一致させるのは怖いような恐ろしいような気がした。その一致ができないままに湊は未だどこか幻想の母を追っている。幻想の母とはなんだろう。妙な子供が妙な理由は現実を見つめたくない厭世的な性分を生み、力なく微笑する。

あの日若かった母の手から握られる鮎は、まったく穢れないものと感じた。その薔薇色の手は16か17と思われるともよに重ねていたのかもしれない。

湊は鮎が好きとは言わず、慰みになると言った。店ではいつも外ばかり見ていた。

春の川を性急に泳ぎ回る鮎。ともよは客の新陳代謝をこの魚に例えていた。湊もまた新陳代謝の一匹となり、流れ来たり流れ去る。あらがうことを諦め、すっかり身を任せたのだろう。時勢が戦中から戦中へ向かうなら、悲しい孤独から離れられない。

「鮎屋は何処にでもあるんですもの」

ともよの一言は、低調なこの話に小さく生きる希望を照らす。

(おわり)



## 『母が寿司を握ると子が育つ』

「では、お客さまのお好みによりまして、次を差し上げます」

手品師のような、母にしかできないオリジナルの手業で、寿司を握ってくれる母。母の手から離れた寿司をすかさず掴み取る子どもの手。また握っては皿にのせられる寿司が、間髪入れず剥ぎ取られていく流れ作業は、まるで二人がこの瞬間のために生まれてきたかのように、別次元のグルーブを巻き起こし、やがて熱狂と化する。

そんな親子の心が一つになる瞬間は、そうそう起きるものではないと私は思う。母と子のこんなにシビれる思い出が他にあってだろうか。

食の苦痛。小さい体が食べ物を受け付けない描写が痛々しい。飢え抜いて死んでも構わない…けれど、なぜかその瞬間に脳裏をよぎる生みの母とは別の「お母さん」。

拒食は、“自分の”母を求める子供の、一途な気持ちの表れなのだろうと思う。子供はただ自分だけを見つめてくれる存在が欲しかったのではないか。

岡山読書会 yuuki さんが「人は決して自分の手に入らないものを追い求める」と話されていた。

私は 3 人姉妹の末っ子だが、幼少時に母を独り占め出来た思い出が殆どない。兄弟がもっと多かった時代に、子どもは母の愛情をどう感じとっていたのだろうか？とずっと不思議に思ってきた。けれどこの小説を読んで、ただ一度きりでも幼少時に母とピタリと心がつながった瞬間があれば、その記憶を胸に人は生きていけるのかも知れないと思った。

湊は、初老になってもなお変わらず母を求めているように思う。その希求する想いが「憂愁の蔭」を帯びた中高年を寿司屋に通わせるのだろう。湊の気持ちを解きほぐすのはちょっとややこしそうだが、謎めいた目の遣り処の先にあるのは「生みの」母の記憶だと思う。食べないことから、母が自分に振り向いてくれた。そして目の前で、自分だけのために寿司を握ってくれた。気づいてくれてありがとう、お母さん。

なるほどおにぎりは般化しすぎているし、手巻き寿司はセルフサービスだから愛情効果が薄い。やっぱりオーダーメイドの握り寿司か。私も一度娘にやってみようかな。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 『 流れ来り、流れ去る 』

私は湊の談話で、自らの心をぐにやりと掴まれた。それは、私自身も幻想の中の母がいたからだ。躰が厳しい母だった。叱られた後などは、「きっと本当のお母さんが他にいるはずだ。」と思うことで溜飲を下げていた。しかし、湊が鰯を食べている様を見て嬉しいのをぐっと耐える、「母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れえない美しい顔をして」いる湊の母のような表情を、私自身も母の中に見つけたことがある。結局、親子はお互いに幸せを融通し合っているのだろう。だから、幻想の中の母と現実の母が重なる感覚はよくわかるのだ。親からすると、かなり身勝手だけど。

「お互いに現実から隠れんぼうをしているような者同志」の常連の中で、ともよは湊にひっかかりを覚える。客の男の扱いには慣れていても、母への郷愁から福ずしに通っていた湊に、自らと同じ孤独をどこか感じ取ったのだ。表面だけ世慣れているが、内実は孤独なともよは、自らも気づかずに湊と「孤独」という観点で共鳴したのだろう。だからこそ、常連客と分け隔てなく対応している湊が許せない。なぜだかは、ともよは気づいていない。

ともよは、客へのあしらいから、客にも「新陳代謝」があると理解していた。自らは杭根の苔のように定着していても、鰯は苔を食んで、流れ来り、流れ去っていく。ともよの人間関係の理解とはそのようだったろう。しかし、湊に対しては食まれるだけの苔になりたくなかった。しかし、同じく「孤独」を理解している湊は、さりげなくともよの前から去ってしまう。まるで、骸のようなゴーストフィッシュを残して…。偶然だが、別れのプレゼントにはエスプリが効いている。

湊と会えなくなって、涙さえためたともよであったが、「鰯屋は何処にでもあるんだもの」と流れ去る鰯であった湊を理解する。

好きな人には、流れ去らずに自らを食ってほしいと願ってしまう私は、まだ湊やともよのように孤独を本当の意味で理解していないのかもしれない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

## 『鮎は没落していく現象の核心である』

(引用はじめ)

子供は、ふと、日頃、内しよで呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鮎を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。もっと、ぴったり、一致して欲しいが、あまり一致したら恐ろしい気もする。

(引用終わり)

この世の現象が、刹那の夢幻に感じられるほど、人は、それだけ自分の内なる本質である意志を、強く意識する、とショウペンハウエルは述べた。

目の前で寿司を握る母と幻想の母が一致しそうになり、彼は、恐ろしい気がした。

そんなものを垣間見てきた湊の『謎めいた眼』は、ともよを惹きつけた。

その証拠に、ともよは、

『眼を振向けられ自分の眼と永く視線を合せていると、自分を支えている力を暈されて危いような気がした。』

それはなぜだろうか？

湊だけが、ともよを支えている、意志の力の在り処を見据えているからだ。

『無邪気に育てられ、表面だけだが世事に通じ、軽快でそして孤独的なものを持っている』

そんな彼女もまた、この世を『春さきの小川の淀みの淵』のようにはかなく感じているが、一方で自分の中の『杭根』の力で自分自身を支えているのだ。

彼女の内なる本質を貫いているこの『杭根』のような意志には、誰も気づかない。

彼女自身もまだ気づいていない。この世では見えないものだから。

没落をくぐり抜け、髑髏魚のようになった湊だけには見えている。

ともよは、子ども時代の湊と似た神経質な部分をもっているが、すでに大人になりつつある彼女は、前途の困難を理知によって乗り越えていくだろう。

現に、彼女は、湊の鋭い理知にふれて深く感化された。

古代ローマの古跡のような病院の焼け跡

湊と別れた哀しみによって、彼女がゆるがされることはない。

「——鮭屋は何処にでもあるんだもの——」

『意志は没落していく現象の核心である。』（ショウペンハウエル『自殺について』）

鮭もまた、没落していく湊の核心であった。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>



